

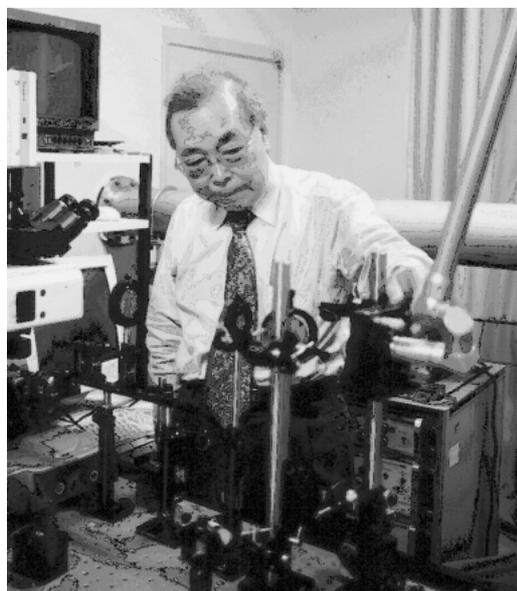
■ 読者投稿欄

黒田晴雄先生を悼んで

太田俊明 (東京大学大学院理学系研究科化学専攻)

わが国の放射光科学の発展に大きな貢献をされた黒田晴雄先生が本年5月4日に突然亡くなられました。まだ72歳という若さで、これからもわが国の科学の発展にご活躍いただけると信じていただけに、我々にとって大きな衝撃です。黒田先生は科学の様々な分野で大きな足跡を残されましたが、ここに簡単に先生の足跡と放射光科学とのかかわりについて述べたいと思います。

黒田先生は1931年東京に生まれ、1953年東京大学理学部化学科を卒業し、引き続き大学院に進学して赤松秀雄先生の研究室に入りました。そして、博士課程ではX線小角散乱を用いたカーボンブラックの下部構造の研究を行いました。ゼロから装置を作り、実験・解析を行って、カーボンブラックの生成機構について博士論文をまとめられましたが、その成果は外国からも大きな反響があったと聞いています。博士取得後、2年間のカナダNRCでの留学を終え、赤松研の助手、講師、助教授を経て1971年39歳の若さで教授に昇進されました。黒田先生は教授昇任後、自ら実験をされることはなく、大体の研究の道筋を決め、予算を獲得してきて、細かい研究指導はスタッフと学生に任せるといふ、研究室の者にとっては理想的な先生でした。先生ご自身は学術会議の委員として、わが国の科学の発展のために何をすべきかというスケールの大きい考えを常に持っておられたように思います。1975年頃から高良先生とコンビを組んで、わが国最初の大型放射光施設建設計画を推進されました。全国を行脚して宣伝し、また、文部省、大蔵省に何度も陳情されたそうですが、その努力が見事に結実して、1982年につくばの高エネ研にフォトン・ファクトリーが完成しました。その後は運営協議会の副議長として施設長の高良先生を補佐して、新しい施設の運営方針の策定にご尽力されました。高良先生の後任にと誘われ、黒田先生も迷われていましたが、恩師の赤松先生から一喝されてご破算になったそうです。その理由は、「もっとわが国全体の科学のことを考えろ」というような内容であったと聞いています。そこで専らユーザーとして、主としてX線吸収分光法(XAFS)の応用研究、理論解析を精力的に推進され、わが国のXAFS研究の発展に大きな貢献をされました。一方、放射光を用いた固体表面研究にも強い意欲をもたれ、東京大学分光化学センター長として、専用のビームラインを建設し、放射光を利用した固体表面研究を進められました。これと並行して、新技術開発事業団の「黒田固体表面プロジェクト」を始め、多くの成果を挙げられました。



東京大学定年後、東京理科大総合研究所に移り、そこで、川崎重工(株)と共同で小型赤外自由電子レーザーの開発を始められました。幸い、学術創成研究プロジェクト「赤外自由電子レーザーの高性能化とそれを用いた光学」が認められ、そのプロジェクトリーダーとして、東大、阪大、北大などからの総勢20名との共同研究を総括し、東大教授の時代以上に多忙の毎日を過ごされておりました。順調に加速器の開発が進み、世界で最も小型の赤外自由電子レーザーが極めて短期間に完成しました。利用研究には先生自らも参画され澁刺と実験にいそまれておりましたが、そのお姿は我々後進にとっても大きな刺激になったものです。先生は70歳過ぎても我々以上にコンピューターに精通しておられ、ユニックスを使いこなし、自ら東京理科大赤外FELセンターのホームページも作成されておりました。5年のプロジェクトが終了し、今後これをどのように発展させていくかという矢先に亡くなられた訳ですが、病床にありながらも最終成果報告書をほとんどご自分で書き上げられました。

黒田先生の死亡のニュースは世界の多くの先生の友人を驚かせ、悲しませましたが、特に先生の40年来の友人である元ケンブリッジ大学副学長サー ジョン トーマス教授によって詳細な訃報記事が「シンクロトロン科学を発展させた化学者」というタイトルでロンドン インディペンデント新聞に5月27日に掲載されました。「シンクロト

ロン科学を発展させた化学者」という副題がつけられたその記事は、如何に先生が外国の多くの科学者にも愛されたかを示す格調の高いものでした。なお、このような日本人科学者の訃報記事は福井謙一先生、猪瀬博先生について3番目ということです。また、内閣府より正四位 瑞寶中賞の叙勲を受けられました。

黒田先生は温厚な紳士で、あまり表に立つことは好まれない先生でしたが、非常に幅広い学識経験と先見性をも

ち、スケールの大きい、バランス感覚の優れた先生でした。先生が亡くなられたことをやっと実感するようになった今、改めて先生の大きさを感じています。事あるごとに先生を頼りにしていた私たちにとって、先生を失ったことは痛恨の極みですが、ここに、これまでわが国の放射光科学を先導していただいたご尽力に感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

一口メモ

ノウゼンカズラ

ノウゼンカズラ科ノウゼンカズラ属の落葉性植物で、原産は中国である。真夏に朱紅色のラッパ形の花が房になって咲くノウゼンカズラはつる性なので、支柱が必要である。普通は太い丸太などに巻きつくように見えるが、幹から出す付着根という根によってくっついている。この性質により壁や塀などにはわせることも出来る。

本夏は甲子園の高校野球の観戦と共に、ギリシャのアテネで開かれるオリンピックの迫力あるスポーツの試合観戦も楽しみで、テレビを見る機会が多くなることでしょう。4年前のシドニーにおいて女子マラソンで優勝した高橋尚子さんの清々しい姿を見られないのは残念ですが、野口、土佐、坂本の若手3選手のワン、ツー、スリーフィニッシュを夢見ています。また、ヤワラちゃんこと谷亮子さんの二大会連続の金メダル獲得と、野球の谷選手と共に夫婦で金メダルが理想です。

(No. 58, K. Ohshima)

